

生活の場としての学校、学級は何を支援するのか

能村重信

1. はじめに

私が本校に赴任してはや9年が過ぎようとしている。この間、小学部にいた7年間では学部研究にかかわり、昨年は自立活動グループの一員として、「学校の教育活動全体を通して大切にしたいもの～学級から広がる支援の一例～」とのテーマで個人研究を行った。

昨年度の研究では自立活動の視点から一人の生徒の事例を取り上げ、生徒を取り巻く学校、家庭や地域の支援体制を整理してまとめ、生徒を中心とした同心円状の家庭、学校、地域などを図式化した。その図をここでは「生活の場」と呼ぶことにする。

今年度は、昨年の研究を一步深め、これまで行われてきた中学部の教育全般に目を向けつつ、学校、学級は何を支援するのかを考えるためにこのテーマを設定した。

2. 目的と方法

目的 一人の生徒にとって生き生きと今を楽しみ、将来のためにも意味のある生活の場を保障するための支援を「空間的広がり」、「時間的深まり」、「人的繋がり」の三つの視点で考える。

方法 主に中学部の教育を概観し、その中から生徒の実態把握の方法や授業を含めた教育活動の内、特徴的なもの(教育的財産)を取り出し、グループ研究者とともに討議し、考察を加える。

3. 教育的財産の例

(1) 空間的広がり の視点から

中学部では生徒及び家庭環境の把握のために家庭を中心とした生徒の行動範囲を記録した「生活地図」というものを入学時に家庭で記入してもらっている。

具体的にA男の生活の場を見てみたい。A男は家庭生活、学校生活において自分なりに見通しをもって生活している。学校では教室や保健室、プレイルームなどを活動の拠点にしながらテレビ、キーボード、本、写真、ブランコなど余暇につながる楽しみをもって活動している。「生活地図」(図1)を見るとA男は家族で外食、ドライブ、親の会の行事(サマーホリデイ)への参加などの家庭・地域での活動がある。

この「生活地図」は、教師が学級懇談で親

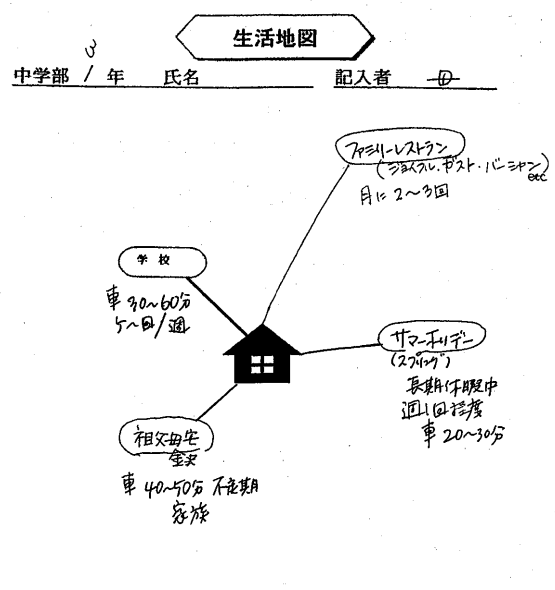


図1 A男の生活地図

から余暇の過ごし方を聞くなどして活用している。次年度以降、年度始めには親に見直してもらい、新しく加わった行き先やもう行かなくなった施設などを「生活地図」に加筆・訂正してもらっている。

このように一人の生徒の生活状況を平面上で図に表してみると生活の場の広がりを知りやすく見ることかできる。「生活地図」は中学部の生徒の家庭・地域での様子を知る上で大切な資料となっている。

そこで学校においても「生活地図」を作ってみようと考えた。A男を中心に学校での居場所、学級やグループの時間おけるさんぽ活動、校外行事などを書き入れたのが、学校における生活地図（図2）である。

校外学習の一部として図中（A）の金沢大学里山自然学校がある。これは金沢大学の角間キャンパス内にある山林であるが、数年前から小学部、中学部を中心に校外学習として春はたけのこ掘り、秋はオリエンテーリングなどの行事を企画し、金沢大学の「角間里山自然学校」事業（※1）の一つとして金沢大学教育学部の佐川哲也先生とも連携しながら行ってきた。里山の自然の中で豚汁を食べたり散策したりすることで自然を五感で心ゆくまで感じることができる大切な活動となっている。

今年度は天候不良や熊の出没で中学部の里山活動はできなかったが、その代わりに図中（B）の内灘海岸でディキャンプなどを行った。そこでは普段の学校生活では見られない海岸線をうれしそうに歩き、波と戯れるA男の姿が見られた。

このように生活の場をトータルで考えると遠足、合宿、旅行などの学部の行事やさんぽ活動などはA男にとって重要な活動であると考えられる。この生活地図を活かし家庭・地域においても更なる生活の場が広がるように今後も保護者との連携に努めていきたい。

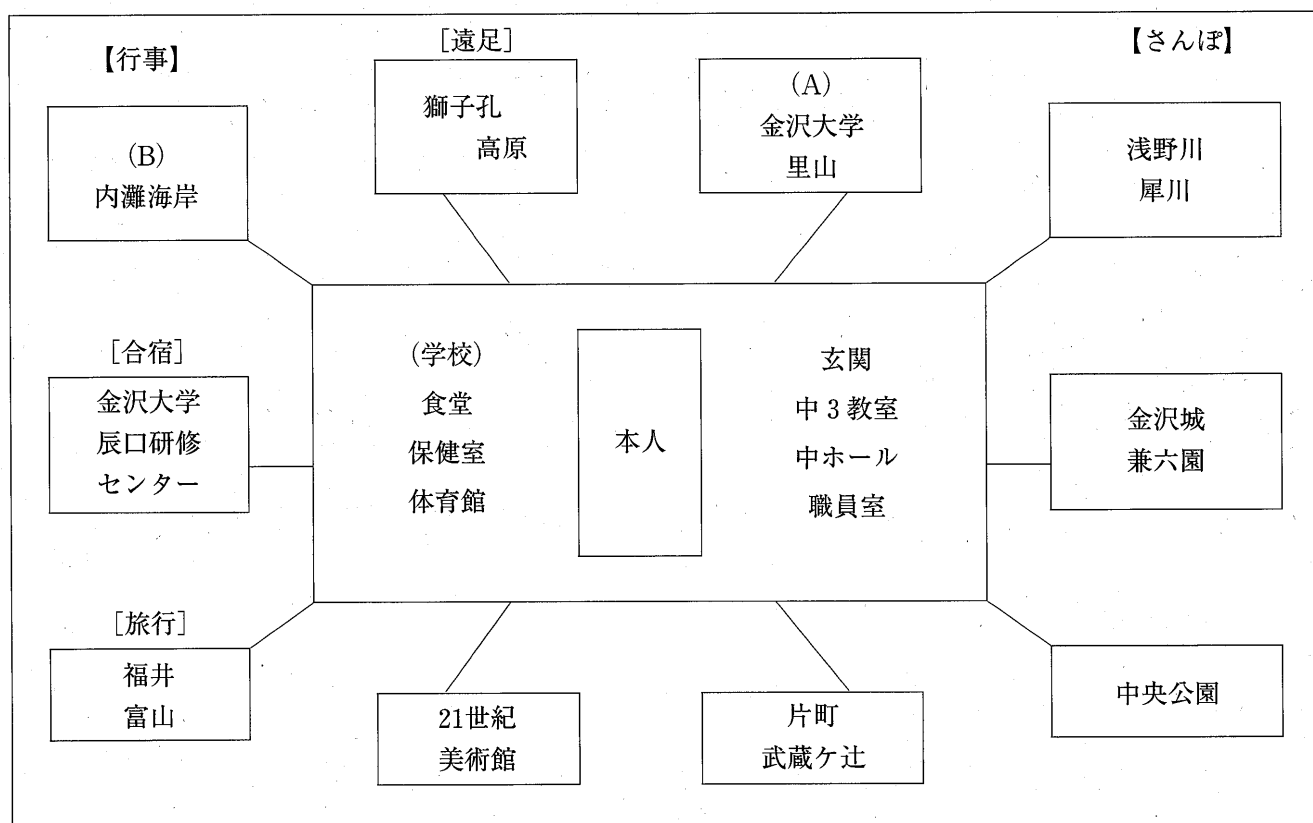


図2 学校における生活地図

(2) 時間的経過の視点から

本校には小学部、中学部、高等部を通して近年、学校で自転車に乗る活動が盛んに行われている。特に中学部では、休み時間、体育の時間等で自転車に乗ることを楽しんでいる。大きな行事としては6年前から5月の運動会で中学部団体演技種目に自転車を取り上げ、全員で自転車に乗るパフォーマンスをしている。3年前からは10月の学部行事として生徒一人一人の自転車を用意し、犀川のサイクリングロードでサイクリングを楽しんでいる。



写真1 運動会



写真2 サイクリング

こうした自転車の活動が生活に大きく影響したB男の事例を紹介したい。昨年B男は本校初めてのケースとして自宅からの自転車通学が認められた。この経緯についての詳細は省略するが、当初B男の自転車通学に関しては本人の意欲を大切にしつつ、安全性を第一に考慮し、保護者、担任がサポートしていった。安全管理面については副校長・部主事・担任を含めた保護者面談をもち、全校職員の協力の下、1ヶ月の試行期間を経て、最終的には昨年11月の職員会議で正式に承認された。その後B男は、雨の日は徒歩通学だが晴れた日は基本的に登下校とも自転車で通学している。

このケースではB男の小学部～中学部9年間という時間的経過を見ていかなければならない。そこには図3で示すように、「自転車通学」までには以下の3要素が考えられる。

・「学校の近くの自宅」

であったこと、「徒歩通学」を通して通学路に慣れ、家庭の協力で信号を渡ったり自動車に気をつけたりして歩けるようになったこと

・「自転車に乗る」に関しては小学部の時から「興味関心」があり、まず「補助輪付」自転車に乗ることができ、

その楽しみがその後の「補助輪なし」自転車の練習を経て、自転車に乗れるようになり、自転車乗りを楽しめるようになったこと

・さらに前に述べた中学部での「自転車の活動」を含んだ行事、休み時間などに活発に自

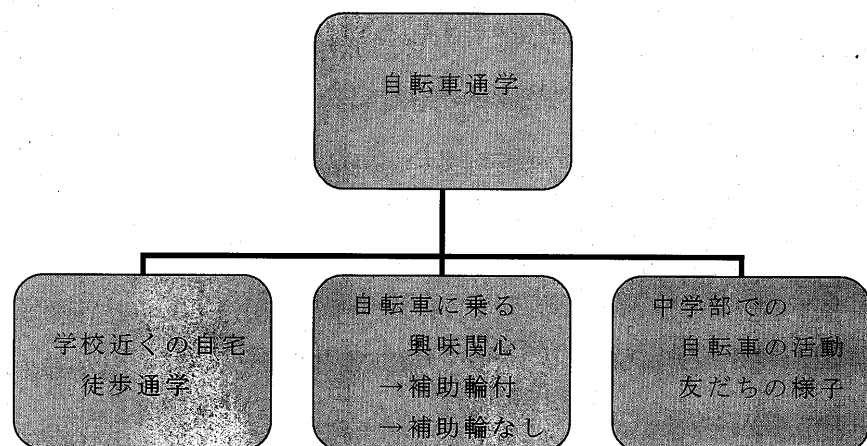


図3 B男の自転車通学までの三要素

転車を楽しんでいるクラスや他学部「友だちの様子」が下校に自転車を使おうというB男自身の発想とその実行に繋がったのだと推測される。

小学部から中学部を経て現在までのB男と自転車の関係というのを見ると、小さい時（主に小学部）では遊び道具として、大きくなって（厳密には中学3年生）からは実質的な移動手段として使用するという質的变化が見られた。その意味でB男が自分で自身自身の生活状況を質的に変えたともいえる。

今後B男は、今春進学する高等部や高等部卒業後に自転車を趣味や余暇活動として利用していくことも考えられる。

（3）人的繋がりからの視点から

現在中学部3年生のクラスには男子6名が在籍しているが、この6名は中学部入学当時から3年間クラス替えがなく、同じメンバーであり、友だち同士の関係が深い。

ここでは、人間関係、特に友だちとの結びつき、つながりという視点でC男の学習における人間関係形成能力の広がりを見ていきたい。

・友だち図鑑（9月）

本校では毎年9月中の2週間、金沢大学教育学部の学生の実習を行っている。本年度は中学部3年生のクラスに2名の実習生を迎えた。教生の先生の「友だち図鑑」

という授業では、C男の友だちに対する観察眼が光った。友だち一人一人について「好きなものはなに？」などと質問していくと次から次と答えが返ってきた。最終的に一人一人の特徴を写真と共にまとめた縦2メートル、横1.5メートルの友だち図鑑の壁画ができた。

・表現会実行委員会（11月）

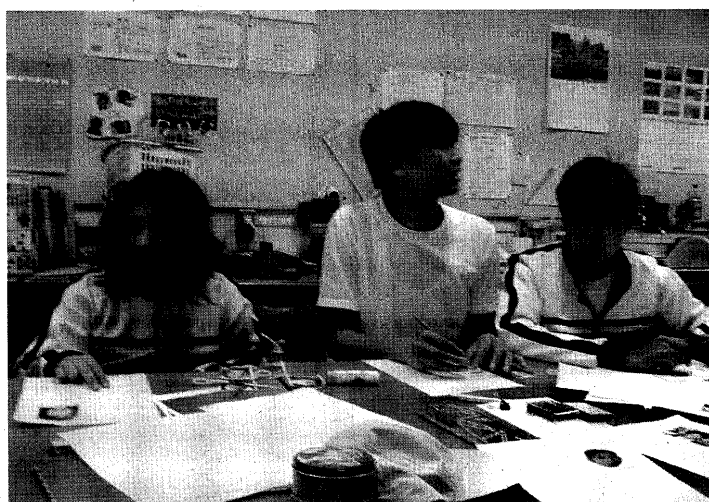


写真4 表現会実行委員会

えることから始まった。ここではC男だけでなく実行委員のメンバーが次々と発言しクラスの友だちのことはもちろん他クラスの友だちのこともたくさんプリントに記入していっ

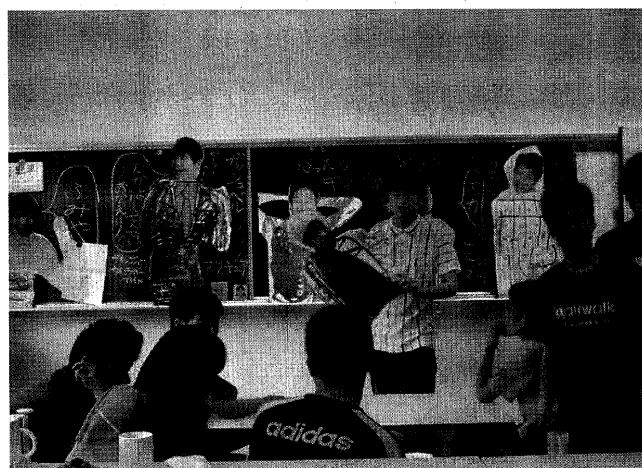


写真3 「友だち図鑑」の授業

本年度の表現会はこれまで以上に子ども主体の表現会となった。中学部では生徒中心の表現会実行委員会が作られ、表現会の1ヶ月以上前から水曜日の午後、中学部の一室に集まり、中学部の表現会の出し物の内容を具体的に考え決めていった。C男もこの表現会実行委員会のメンバーに立候補し、第1回の実行委員会で書記の係となり、その後毎回の実行委員会で決まったことを書き残してくれた。（写真4 表現会実行委員会）第2回実行委員会では中学部の友だちの大好きなことを考

た。こうして貯えた友だちの好きなことを表現の内容に盛り込みながら、その後、踊り、音楽など内容が徐々に決まっていた。

・お好み焼き屋さん（12月）

中3では生活の時間の中に、昨年度はたこ焼き作り、今年度はお好み焼き作りをテーマとした単元を組み立ててきた。春、お好み焼き屋さんに行き、実際にお好み焼きを自分たちで作ってみるところから始めた。夏、秋と教師と一緒に材料を買ってきたり、一緒に材料を切ったり、自分たちでできるところは自分たちで作ったりしながら何度もお好み焼きを作ってきた。2学期の最後12月にはみんなで作ったお好み焼きを売ろうということになり、準備、販売と忙しく働いた。特にC男は同級生から店長に指名され、快く承諾した。当日はお好み焼き100枚を売り、売り上げはなんと1万円の大金に乗った。「100枚で1万円、高いねー！」と感動していたC男であった。共に作る、売るという活動を通してこれまでの人間関係をさらに広げ、働くことの一步を刻んだ一日であった。

4. 考察と今後に向けて

生活の場という視点で中学部教育の財産である生活地図、自転車の取り組み、友だちとのかかわり、の3点について今後に向けての考えを含めて考察を加えたい。

- ・「生活地図」についてはこれからも保護者との連携、また生徒を知るという観点からも大切にしていきたい。また、今回作成した学校における生活地図はさらに改良を加え、個別の指導計画などでも活用できればと考えている。
- ・「自転車」については運動会やサイクリング等の行事や通常の体育の授業などにおける活用を今後も続けていきたい。さらに自転車の整備と自転車ロードの拡充など物的環境整備にも取り組んでいきたい。
- ・「友だちとのかかわり」については、昨今のキャリア教育（※2）につながるものだと考えられる。現在、小・中・高12年間の連続した進路指導プログラムの必要性が叫ばれている。小学校段階から児童生徒の発達段階に応じたキャリア教育が必要と考え、そのための学習プログラム（※3）で育みたいこととして「自分の良さや個性が分かり、他者の良さや感情を理解し、尊重する」「自分の仕事に対して責任を感じ、最後までやり通そうとする」など期待される具体的な能力・態度がある。今後もキャリア教育を中学部の教育活動に関連させながら、その理解を広げ、実践を続けていきたい。

最後に学校として、今年度は入学式に始まり、運動会、表現会など主な学校行事において、これまで以上に児童生徒主体となるように、無理なく参加できる企画、運営がなされた。このことについてはここで詳しく述べないが、学校という生活の場がよりよく改善された支援の取り組みの例である。

これからも教師は生徒の最大の教育環境であるという考えから、生徒一人一人の生活の場を保障する（維持する・広げる）ために、生徒を取り巻く人的・物的環境を見直し、本人と保護者のニーズにあったよりよい支援を探っていきたい。

<参考文献>

- （※1）『金沢大学角間キャンパス「里山ゾーン」を活用した里山学習プログラムの研究開発』金沢大学 2004
- （※2）「初等中等教育と高等教育の接続改善について」中央教育審議会答申1999. 12
- （※3）『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査報告書）』国立教育政策研究所生徒指導研究センター2002. 11